慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高田保馬著 社会学概論
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.483(171)- 484(172)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

動が今迄其主義として廣告をしたり宣傳をしたりして加入を勸誘することはなつた。又其必要もなかつたのである。何となれば、今日に至る迄、勞働者間には此運動が擴張せられる畑は非常に大きくて、組合は何等の骨折なくして成長したからである。若し何等かの方法によつて組合の本質を知らせたならば、上流中流――少くとも中流階級が之に喜んで加入しないことはなからう。大規模産業の發達、産業集中制度の進歩と共に、中流階級が次第に壓迫せられ、益々生活に困難を感じて來るばかりである。此生活難を救ふ唯一の道は消費組合員となることである。中流階級中でも、最初之れに加入するのは俸給取り、並びに自由職業者等で、かくして得意を失ふ所の小賣商等は、組合企業に壓倒され、遂には彼等の商賣を投げ出して、組合に加入するか、資本家制度の勞働者となるか、何れかの道を選ばねばならない。しかし、彼にして理性を有する以上は組合に加入する道を選ぶに違ない。又、假令階級的觀念が強くて、資本家企業の下に走らうとしても、得意の殆んど大部を失つた資本家企業は、事業縮小のために、彼等の大部を收容することが出來ないから、結局は小賣商人等も、組合員となるより他にない。今日既に組合に壓倒された商人等が、何時の間にか組合の支配人又は店員となつてゐる側は少くない。斯樣に中流階級消費者が、自覺して組合員となると、又余議なく組合員となることを問はず、殘りの少數の資本家等は、彼等の生産品の捌け口がなくなるから、事業を繼續することが出來ない樣になり、從つて投資する道も無くなり、收入の道がなくなるから、此まゝ行けば破産の他ない。剩さへ生活必要品も組合以外からは得ることが困難になるから、一方に於て彼の資本を少しでも有利に使用するために、組合員とならざるを得ないこととなるのである。但し、彼が幾株を持たうとも組合の一人一票主義には少しも變りのないことは勿論である。（未完）

新刊紹介

社會學概論

高田保馬著

岩波書店刊行
菊版六一〇頁
定價三圓五十錢

近來世運の變遷と共に、社會的なる諸問題に關する論議は非常の勢を以て增加し、所謂汗牛充棟の言葉を以て、形容するとしても、敢えて過言とは云ひ得ない。然るに社會そのものに關する研究、即ち社會學の研究は寥々たる觀なきを得ない。この時に當り先きには、千數百頁に上る「社會學原理」「現代社會の諸研究」「社會と國家」等を、今は六百頁に余る「社會學概論」を出して、我が社會學界の寂寞を破ぶる者は、文學博士高田保馬氏である。

今こゝに紹介せんとする「社會學概論」は第一篇社會學、第二篇社會の形成、第三篇社會の相互關係、第四篇社會の結論を論じてゐる。著者はその執筆の動機を次の如く語つてゐる。「私の社會學に關する考は以前『社會學原理』を書いた時と今と別に著しく變つては居ない。然れども此書は前著の縮約と見るべきものに非ず、一の新なる著述である。私は當初簡潔なる書き物に於て自分の社會學組織を新に表現したいと考へて筆を執つた、其の動機は三ある。第一前著において僅に一部分より示さゞりし所の社會學方法論に關する私見を少くも、其の概略なりと表示せむが爲。第二、前著に於て餘りなる紙數の增加により省略したる二三の問題をも取扱はむが爲。第三、社會學の問題の設定、又は種々なる內容に關する點に於て前著を公にしたる後に多少變化したる自分の見解を明にせんが爲。」と。さうして著者は、その社會學方法論に其の主力を注ぎたるが如くである。（序文）

著者は先づ科學を分類して、普遍化的科學と個別化的科學とにしてゐるが、この區別は自然科學と歷史學との區別である。換言すれば、價値に關係するか否かの區別である。然も價値に

關係する現象もまた個別的觀察をなし得ると共に、普遍化的觀察が可能である。こゝで著者は普遍化的文化科學を認める。これが所謂社會科學である。さうして著者の社會學は所謂普遍化的文化科學の一である。即ち社會學は從來の社會學者によつて考へられたやうに、他の社會科學を從屬せしめて其上位に位するものではないのである。そは一の特殊的社會科學である。然るが故に著者は社會の第一原理を探究せんとする一般的社會學の可能を否定し、社會學と社會哲學とを嚴密に區別すべしと主張する。

然らば社會學は何を其の研究の對象とすべきか。そは社會そのものである。さうして社會を社會たらしめるものを呼びて結社的者（The social or associational, das Verbändliche）と云ふのであつて、其の本質は「望まれたる共存」である。さうして社會學の目的は社會を中心として、其の原因、其の結果、其の相互關係の三方面に着眼し、其の間に行はるゝ法則を明らかにするのである。かゝる社會學的法則は心理的傾向律的の法則として表はれ、その自然科學的法則と異るは、之が一の社會形態のみに妥當であることに存する。即ち社會學的法則は一の歴史的條件を前提としてのみ妥當性を有する。

著者はこの見地に立つてその社會學を構成した。所論大概當を得てゐると思ふ。評者は文章のことに就ては、他に注文するだけの力量を持つてゐるものではないが、著者の文章にして尙ほ一層平易で、通讀に容易であつたら、本書が社會學を普及する上において、一層の効果を收めたであらうと思ふ。素より文章の如きは、その中に盛られたる思想に對して、一層大なる價値を持つてゐるものではないと思ふが、たゞ此の良書が文章のために讀まれないとすれば、我が學界の不幸これに過ぎないのであらう。斯くの如き外形上の小なる缺點は兎に角、本書は不振なる我が社會學界に於ける最新最良の書たるを失はないものである。切に社會科學研究者の愛讀を祈る。

（加田　哲二）

杉程次郎氏著「最近貨幣論」を評す

未だ外國書によりて啓發せらるゝこと多き時代に於ては、學者的良心の缺乏せる三四の人々が飜譯書を以て自家苦心の著書なるかの如く裝ひ、公刊忽ち假面を剝奪せられたるは嘗て經驗せるところなるが、最近に至り新たに邦書の飜案を企てゝ、これを著書なりと公言するものゝ現はれたるは、眞に曠古の現象なり。余はこの現象を以て我が國は既に外國書の飜譯時代を去り、獨自の研究時代に到達することを得たる證左とするに足るべしと確信し、私かに慶賀に堪えざるものなり。而して最近余に斯くの如き愉快なる確信を齎したるは、中央大學專修大學教授法學士杉程次郎氏の「最近貨幣論」にして、若し余の確信が誤解に基くものなりとするも、杉氏が「最近銀行論」及び「最新經濟學」と相前後して公刊したる右の「最近貨幣論」は尠くとも我が國に於ける貨幣に關する著書の中、邦書の飜案を以て著述（編纂にあらず）をなしたる最初の出版物たるの名譽を有するものなり。

寡聞なる余はこの名譽を有する「最近貨幣論」の著者杉氏の名聲に關しては最近に至るまで多く知ることなかりしが、多年斯界の開拓に從事し、研鑽よくその蘊奥を極めたる一事は、若し羊頭を掲げて狗肉を賣るものにあらずんば、卷頭の序文によりても略ぼこれを推知するに難からず。曰く「余や久しく私立諸大學に於て金融論貨幣論及銀行論等に關する講座を擔任し學理と實際とを對照して各種問題の講究に務め吾人の日常使用しつゝある貨幣の眞相を探究しつゝあり」云々。而して既に堂に入りたる著者杉氏の眼に、從來權威を以て許され定評ありし貨幣論の多數の邦書が、殆んど粗漏杜撰、何等齒牙に掛くるに足らずと映じたるは、誠に當然にして杉氏が悲憤慷慨の餘り「坊間鬻ぐ所の貨幣及銀行に關する書籍其の數決して尠しとせず然れども其の多數は繁閑宜しきを得ず採て以て參考に資すべきもの頗る寥々たるの有樣なるは吾人